

浄瑠璃素人講釈 碁太平記白石噺 七ツ目切 新吉原揚屋の段

杉山其日庵

〈出典：「浄瑠璃素人講釈（下）」岩波書店、平成16年11月〉

この外題は、天明五〔一七八五〕巳の年の頃、月日は判らぬが（大正十五年を距るおよそ百四十二年前）、江戸の結城座に上演したはずである。作者は紀上太郎と云って、何でも今の三井家の祖先に当る人が、頗る風流な人で、常に多くの芸人を呼集めて、浄瑠璃の創作に浮身を瘦して居たとの事であるから、その人らしいのである。「糸桜本町育」の如き、「志賀の敵討」の如きも、皆この三井旦那の匿名紀上太郎の作らしいのである。

丁度その頃江戸に下っていた竹本紋太夫に、「五ツ目」とこの「七ツ目」を節付けさせたとの事である。故にこの「揚屋の段」の役場は、紋太夫と思わねばならぬのである。この紋太夫と云う人は、三代目で前名倉太夫と云ったそうで、本名此村屋治兵衛と云っては、上方でも江戸でも評判の名人で、斯道の物識と云われた人の由である。元来この紋太夫と云う名の初代は、二代目義太夫、即ち播磨掾の門弟であって、「薄雪」の「清水の段」や、「橋供養」の二の切や、「双蝶々」の「米屋の段」等を語り、終には竹本上総掾と任官して、「布引」の二段目切「義賢館」の場を語り、講座にて芸往生をしたと云う名高い人との事である。二代目は当時名人輩出の折からとて、二段目の切までは役が付かなかつたらしいが、物識としてはなかなか名高い人であったとの事。それから三代目紋太夫はこの倉太夫であって、あまり三人とも芸が豪らかったため、その以後この名跡を継ぐ者がなかったとの事である。この人の風を、故撰津大掾が嘯しをしていた事があった。

「私はマダ物の解らぬ時に、三代目吉兵衛さんから、紋さんの嘯しを聞きました事がござりました。初代政はんの風を呑み込んで、情語りの風を開いた人は、この人じゃと云うておられました。また後年に至り、団平さんは、紋さんの風は総ての芸が抜けるほど呑込むと云うのが本であるから、人情が自在に語られるのである、と云うておられました。なるほど『揚屋の段』も、私は度々役は付きますが、しのぶの詞など、十分に鍛錬して呑込まぬ事には、アノ詞を云っても情が浮く事にはなりません。また宗六の詞でも、鍛錬に鍛錬をして総てを呑込まねば、この役の腹が浮いて来ませぬ」

と云っていた。庵主の聞く所によれば、この宗六は、千葉三郎兵衛とかを当込んで作者が書いたのであるから、その心で詞を考えねばならぬと。元来修業も鍛錬も、この詞が大事の眼目である。

かつて三代目越路太夫が、庵主に嘯しをしていた。

「私は師匠が急に病気になられまして、『白石の揚屋』の代り役を致した事がござります。三味線が松葉屋（豊沢広助）さんでござりました。何様直ぐに飛んで出て語りましたから、演了してから、松葉屋の師匠が風呂に這入っておられましたから、其所へ行きまして、板張りに手を付いて、『師匠の病気が如何かと思ひますから、明日からドウかお

稽古を願うと云いますと、松葉屋さんが『何をえ』と云われますから、『へい、白石を』と申しますと、松葉屋さんが顔を手拭で摺っておられましたが、ちょっと止めて、考えておられましたが、やがて私の顔を振り向いて、『アア、マア、イイ、今日位の所で、ドウにでも遣つとき……………、稽古したかて…………… 味好う遣りゃへん……………お前らでは一生遣られぬかも知りゃアへん』と云うて、稽古をしてくれやはりまへんので、心の中で甚だ残念に思いまして、そのままに語ってはしまいましたが、程経まして、二見の師匠の機嫌のよい時、松葉屋はんの云やはった事を咄しをしたら、師匠が、『アア、アノ氣むづかしい人じゃさかい、そない云うたのじゃ。その松葉屋に云われた事を、マア悲しむ事を後にして、よく思案をせぬ事には、芸の事は解らぬぞえ。元々この道で七ツ目と云う物は、それ位の芸にならねば、口で教えたからで解らやへん。講釈の七ツ目、加賀見山の七ツ目、忠臣蔵の七ツ目、皆自分の力で思案せねば、解らぬ物である。聞いた位、教わった位では解らぬ物と思いなはれ』と云われて、ビックリ致しました。その後、私が或るお茶屋で素人さんにこの『揚屋』を稽古していましたら、奥に大隅さんが来ておられまして、後で挨拶に参りましたら、大隅さんが小声で——貴田はん、『揚屋』のお稽古の仕方が違うぜ。アレでは情はまるで語れておらぬ。私は清水町の師匠に、『ヲ、姉さアでムるかいノウ』と云う所を、コレ大隅、お前は遠国から、年の行かぬ田舎娘が江戸へ来て、散々恐い思いをして、氣も魂もワナワナしている所に、図らず実の姉と解った時、嬉しいか悲しいか、その娘心が解って語っているのか。『ヲ、姉さアでムるかいノウ』、何と云う情けない詞遣いじゃ。私は、そんなお前が了簡なら、稽古にでも、お前の語るのを聞くのはいやじゃ、と云われた時は、ゴツンと鼯鼠が石に当たったように、今日まで思案ばかりして、『揚屋』はヨウ語る気にならぬのじゃ。この七ツ目は総て思案をして思案をしてし抜いて、第一に腹が合点して、サラサラするまでにならぬ事には、情が浮いて来ぬと思う——と云われました。私は大隅さんとは芸の風も元から違いますので、云やはる事を余り気にも止めずにいましたが、この時ばかりはまた『揚屋』でビックリ致しました」

と云うていた。かかる組立で出来ている物らしいから、本当に七ツ目を修業するなら、先ずその腹構えが肝要であると思うのである。

始めの弾出しが、日本無双の面白き心持で弾く撥擲きで、「ツンツンツンツン」と「ノリ」で弾く。「入相の」とフリ切る力がむづかしい物で、入相でも陰気にならぬように、「シエン」「鐘さへ早く」と出来るだけ陽気な入相に語る事。それから「暮れ果てゝ」が何時も「一」の音に落ち、それがイカヌそうである。「ニジッタ、ギン」に落ちるとの事。「廓の」と云う「ウクオクリ」も「中ギン」の心であるとの事。「万灯会」で始めて「一」に据るのであるそう。歌舞の菩薩は時代に語るとの事。「わけて全盛」から世話になるそうじゃ。「客噂」は「キャク——ウウ」と云って「ウワサ」を別に云わねば、「キャク——ワサ」になるとの事。信夫の詞もよく氣を付けて、「ヲヤヲヤヲヤ、ヲンジロサアタチ、人が」と云う「ヒと」は、「ウと」と云うつもりで、「ネソベツテ居

る」と云う中に「ネソベッテール」と云うつもりで、「キトウラへ」と云う中に「キトウレへ」と云うつもりで、「ニカイ」を「ニケ——」と云うつもりで、「ブチアゲテ」を「ブッチャゲテ」と「ノン」で「ツメテ」云うつもりで、「コリヤマア、ナシタル」を「アシ」と云うつもりで、「ドコモカモヒカリ」を「フカリ」と云うつもりで、「クシサア」を「クッサア」と「ツメ」るつもりで、「ヒッカカッテ」を「フッカカッテ」と云うつもりで、「ヲ、ヤサ——シナ」と「サ」を引く事。「メコワラジ」を「ワラズ」と云うつもりで、「タズネテ」を「タシネテ」と云うつもりで、「ウラダケ、ヒトリ」を「ウラダケ、フトリ」と云うつもりでとの事。マダ書けば沢山あるが、これらは寛政六年頃の『奥州言葉の色草』と云う本によって、調べ上げたとの事である。

それから奥になって、「その五月雨の暗き夜に」と云う文句が大性根の処にて、この音が煮え込むように据らねば、奥にならぬとの事。「ツシ」と聞いて直ぐに「敵を討つた」と云ったら、宗六にならぬとの事。「息」があって、眼色をかえて云うとの事。それから「乗つて飲むやら唱ふやら」の「カワリ」は、芸の気で腹から「カワル」事。「意見上手の親方が」と云ったら「こもる」と「間」で云って、「ウレイ」で「ナアサアケ——ニイ」と「ヘタツ」て情を持って、「宮ヤア城野が」とやさしく、「妹を」「チンテン」「部屋に、奥座敷ィ——ィ」と切るののであるとの事である。

## 注

- (1) 典拠不明。初演は安永九（一七八〇）年正月、江戸外記座。
- (2) 安永六年三月、江戸外記座初演。作者は紀上太郎。
- (3) 安永五年八月、江戸外記座初演。作者は紀上太郎。
- (4) 『音曲高名集』は二代、『増補浄瑠璃大系図』は三代とする。
- (5) 『外題年鑑 安永版』は、上総太夫（？～一七四九、初名紋太夫）とする。
- (6) 三代野沢吉兵衛（一八二一～一八六二）。初代鶴沢勝鳳の息。鶴沢文三に入門。鶴沢市次郎、二代鶴沢勝鳳を経て、天保十一（一八四〇）年三代吉兵衛を襲名。五代染太夫、五代春太夫、南部太夫時代の撰津大掾等の三味線を弾いた。通称鬼吉兵衛。
- (7) 三代竹本越路太夫（一八六五～一九二四）。二代竹本越路太夫（後の撰津大掾）に入門。竹本常子太夫、四代さの太夫、六代文字太夫を経て、明治三十六（一九〇三）年三代越路太夫を襲名。大正四（一九一五）年からは文楽座の紋下となる。
- (8) 明治二十七（一八九四）年九月、御霊文楽座の時か。
- (9) 五代豊沢広助（一八三一～一九〇四）。三代豊沢広助に入門、豊沢豊之助を名乗り、後に四代広助門下となる。初代豊沢富助、二代猿糸を経て、明治三（一八七〇）年五代広助を襲名。通称松葉屋。二代団平と並び称される名人で、団平が彦六座へ行った明治十七（一八八四）年以降、文楽座の三味線紋下を勤めた。同二十二（一八八九）年以降、二代越路太夫（後の撰津大掾）の三味線を弾く。
- (10) 撰津大掾のこと。

- (11) 三代越路太夫の本名は貴田常次郎。